
月と戦星

阿弥伊 美貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と戦星

【Nコード】

N1844R

【作者名】

阿弥伊 美貴

【あらすじ】

魔法によって成り立つ世界。少年少女は戦争の中で出会い、必死に生きる中、想いを寄せ合い、共に夢を見る。

戦の炎が照り返す中、少年カウザルに幼い王子の護衛及び側近を命ぜられる。その先日。カウザルの仕えるライテル帝国が、長い戦いになることを見越して、王子を安全な場所へと避難させることを決めた。戦争の喧騒から離れた場所で時が来るまで穏やかに暮らす為に、王子と側近合わせて四名は、身分を隠してホットレッド村に住むことになる。

少しずつ戦争という毒に蝕まれる世界で、
彼らの戦いが火蓋を切る。

始まりの戦火

ここは、ライテール帝国。世界一の領地と人口を二千年以上も保持し続ける巨大国家。比例して、戦闘員の平均戦闘能力は各国の平均より群を抜いて高い。

時は一万四千六百年。帝王の孫息子が生まれてから三年の月日が経った頃、大広間に一人の子供が姿を現した。

夜だというのに、外の戦の為に赤々と照らさせる中で、大広間の中心にいる青年に敬礼の姿勢をとる。

「魔導騎士団長が息子、カウザル・セバン。只今、参上しました」「うむ。……カウザル・セバン。貴公を現時点で以って、ロンソワ帝王の孫息子及びマース様のご子息で在らせられるマリス様の護衛と側近を任命する」

「はっ」

「貴公の他に、六歳のロダー・スミス。マリス様と同年であるウイリアム・フィンスが、護衛と側近を任命される」

「はい」

「貴公は今八歳。成人となる年まであと十年あるが、年長者としての自覚を持ち文武共に励みなさい。良いな？」

「はっ、仰せのままに」

カウザルは、八歳とは思えないきびきびとした態度で答えた。

「……わかつていると思うが、事態は窮する。一刻も早く、マリス様をこの状況から脱出させなければならぬ」

「はい、承知しております」

「貴公は、他二人と共にマリス様をホットレッド村へお連れしろ。

これは特級任務。心してかかりなさい」

「はっ！」

青年は頷き、威厳に満ちた声で言った。

「ライテール帝国の至宝たるロンソワ家に仕える者として、恥ない

行動を常に心がけるのだ。良いな」

「はっ」

「では行け！」

「はっ、失礼致します」

きびきびと敬礼をとり、カウザルは大広間を離れてマリスと他の側近の待つ部屋へと急いだ。

「カウザルっ。こっち！」

「ロダー！」

カウザルは呼ばれた方へ駆け寄った。

「状況は？わかるかい？」

聞かれて、ロダーは首を振った。

「でも、側近としての役目は理解している。……カウザル、あんたがリーダーだ。俺はあんたの指示を仰ぐようにって、言われてる」

「そうか。なら、先ず道を確認するぞ。ホットレッド村までの道は頭に入っているから、お前は俺から絶対に離れるな。あと、幼児二人を連れて走れるか？」

「長時間は無理だよ」

「なら最初だけ持つている。俺が斬り込みをやるから、その後はマリスを持つ」

それを聞いて、ロダーは瞠目した。

「何だ？」

カウザルは訝しげに聞いた。

「マリス様って呼ぶようにと言われたから、あんたが呼び捨てにしているのを見て……少し……」

「ああ。……ロダー、お前も呼び捨てにしておけ。これから行くところは、身分を隠して住まうところなんだから、いくら相手が王族とはいえ、……いや、王族だからこそ徹底的に役目をこなすんだ」

「……わかった」

「よし、じゃあ行くぞ」

ロダーはマリスとウィリアムを抱え上げると、戦火の中へ駆けて

行くカウザルの後を追った。

「父さん！」

カウザルは、凡そ八つの子供とは思えない力で敵を叩き斬ると、父親の方へ振り返った。

「わかった！……総員、攻撃開始！！」

カウザルの父ラゴイエスの号令に、魔導騎士団は防御を捨て、一斉に攻撃へと回った。それに乗じ、二つの幼い影が戦場を駆け抜ける。

彼らは、兎に角走った。

カウザルは、子供でも見境なしに襲って来る敵を斬り倒し、ロダ―は、幼児が怪我をしないように大事に抱え、走り続けた。途中で二人の幼児を分担する余裕もなく、ただがむしやりに目的地へ突き進む。

しかし、無事ホットレッド村に辿り着いたら、辿り着いたらで、戦に巻き込まれた子供のように姿を整えねばならない。偽装も終わると、村の入口に二人はくたくたになって倒れ込んだ。

始まりの戦火（後書き）

初めての投稿作品なので、勝手が分からなかったり、拙いところがあったりしますが、読んで頂けると幸いです。

ホットレッド村

カウザル達がホットレッド村に辿り着いてから、九年後の早春。旅人の格好をしているカウザルは、馬をゆつくりと走らせながら久々の景色を眺めていた。

第十五次世界大戦が始まってから、九年が経った。彼の住まうホットレッド村には、まだ戦争の火の粉は降り掛かってはいないが、それも時間の問題と言われている。

そのような最中、カウザルの元に本国から久々の召集が掛かった。彼は戦局の荒れた戦争に参加したが、それを三ヶ月程過ぎたからだろうか、マリスの許へ戻るよう命令が下った。

今日は、その帰りである。

カウザルはため息をついた。

十五歳で帝国軍に入隊してから、早二年が経とうとしている。

カウザルはマース帝王の息子であるマリスのお目付け役であるが、普段は軍に従事することはない。しかし、彼は非常に有能な人材なので、よく戦場へ召集されるのだ。

年長者として本国に定期報告を入れるのがカウザルの仕事なのだが、最近はその召集が多いため、代わりに軍人になったばかりのロダーがそれを担っている。

しかし、このままの調子で行くと、村人達に懸念を抱かれそうだが、ホットレッド村の人々は、カウザル達が王族や貴族であることを知らない。あの時だけ村から山一つ向こうは先で行われた戦闘に、巻き込まれて村まで逃げてきたと思っている。そう思わせるようにしたのは自分達だが。

その為に、短期で何度も召集されるとするのは、ただの志願兵としてはおかしい訳で。二つ下のロダーはまだ下っ端として片付けられるが、自分はとうである。

ライテール帝国は、その規模と国民意識から志願制だ。そしてホ

ツトレッド村では、幸いというべきか、軍役に就いているのはカウザルとロダーだけ。

だが、いくら軍事に疎い彼らでも、商人や旅人などから疑念を抱かれたら気付きかねない。

家に帰ったら父に手紙を書こう。と疲れた様子で考えを纏める。ふと気配を感じ、カウザルは馬を止めた。気配が動かないのを感じて、馬から降りる。

気配のするほうへ慎重に歩いた。極力音を出さないように茂みをかき分けていくと、次第に荒い息が聞こえ始める。カウザルは己の気配を完全に断つと、声の人物の背後へ回り込んだ。

敵兵だった。怪我を負ってから時間が経っているのだろう、大洋民国軍の軍服に染まった血の色が、だいぶ黒ずんでいる。

何を思ったのか、カウザルは敵兵の前に姿を現した。案の定、敵兵は身を強張らせ、警戒心も露にカウザルを睨み付ける。

「……怖がらなくて良い。君に危害を加える気はない」
カウザルが落ち着いた声で言うも、敵兵の警戒心を煽っただけだ。上がる息を落ち着かせ、敵兵は低く呟いた。

「殺すがいい。……軍服を着ていなくとも……お前が軍人であるのは、わかっている」

敵兵は言葉を一旦切った。

「……それとも、俺から情報でも……得るつもりか？」

息も絶え絶えに言う敵兵に、カウザルは笑みを浮かべた。その笑みが、敵兵の癪に障る。

「何がっ……おかしい……！」

「いや……すまない。——そうだな、俺の家にも行こうか。そこでなら、ゆつくりとその傷を治せる」

カウザルの言葉に、敵兵は瞠目した。

「何を……言っている！？——あ……お前、国軍の者か……？」

「いや、俺は帝国軍の者だ」

まさか、勘の良い人だなあ。と思われているとは露ほどにも思わ

なかっただろう。

仲間ならばまだ納得がいくと思う敵兵に、カウザルは、敵兵がまた瞠目するようなことを飄々と言つてのけた。刹那。相手が動けぬことを良いことに手刀を下ろす。

「…な！……あ」

敵兵が為す術もなく崩れ落ちるのを抱きとめ、傷に障らないように気を付けながら抱え上げる。

「まずは、傷を治さないとな」

カウザルはそう言つと、来た道を戻り、ホットレッド村へと馬を走らせた。

小さな村に流れる川の一角に、少年は姿を現した。

「いつち、番、乗り〜！」

少年は叫ぶと同時に、深い川の中へ飛び込んでいった。途端、少年を叱る声が辺りいっぱいに響き渡る。

「なんだい？リリーレ」

川の中に潜つていた少年は顔を上げた。

「マリス！何度言つたらわかるの！」

リリーレと呼ばれた少女は仁王立ちして、マリスを睨み付けた。

「まだ川へ入るには早すぎるって言われたばかりじゃない！春一番の風が吹いたばかりのこの季節に、川へ入るなんて無謀よ！雪解けの時期はまだ終わってないってことぐらい、知ってるでしょ！？…ちよつと、人の話し聞いているっ？」

「聞いている聞いている。わかってるよ、この時期に入っちゃいけないことぐらい」

マリスは呑気に言い返すと、また川の中を泳ぎ始めた。

「わかってんなら、早く上がってきなさいよ！馬鹿！！」

「リリーレ！！」

「はわ!？」

急に真後ろから叫ばれ、リリーレは驚いたように後ろを振り返った。

「ロダー!…お、驚かさないでよ!」

「あはは、ごめんごめん」

笑って謝る少年を憮然と睨みつける。彼にはいつも誠意が感じられない。カウザルやウィリアムとは大違いである。あと、マリスのふざけた性格は絶対ロダーの所為だと断言出来る。

「まあ、良いわ」

と、リリーレは諦めたように首を竦めた。

「丁度良かった。マリスが、また勝手に川へ飛び込んでいったの。危ないって言ってるのに、全然聞く耳持たないんだから!」

王子の側近に任命され、近頃多忙なカウザルの代わりに本国へ定期報告を入れ終えたロダーは、リリーレの話を聞くと、ため息をついた。

「あ、ロダー!お帰り!」

ロダーに気付いたマリスは、満面の笑みで手を振った。

「ただいま」

ロダーは返事をしたあと、リリーレの方へ振り向いた。

「リリーレ、あとは俺に任せて」

「え、…わかった。…じゃあね、ロダー」

「うん、じゃあな」

リリーレは未だ川に居るマリスを睨みつけ、この場を離れていった。

ロダーはリリーレを見送ると、再びマリスの方へ振り向いた。

「…マリス、今すぐここに来い」

凄みのある声で呼ばれれば、マリスは逃げたいのを堪えて川を上がった。春先の寒さが身に凍みる。

「…何？」

一応聞いてみると、ロダーの叱責が下った。

「何、じゃないっ。……これをカウザルが見たら何て言うか……！」

「……ロダーが怒られるから？」

叱る理由がリリーレと違う気がして、マリスが恐る恐る訊ねると、ロダーはしっかりと頷いた。

「やっぱり……」

「お前の所為で怒られるのはご免だ」

「何でちゃんと見てないんだ！って？」

「そう」

別に風邪一つどうだって良いだろ。

と、数年前にロダーはカウザルに言ったことがある。その時の恐怖と言ったら半端なかった。

カウザルはロダーを睨みつけた。

「その風邪一つに、どんな危険が潜んでいるのか分からないのか？」

それはもう、恐ろしかった。蛇に睨まれた蛙とはまさしくこのことで。

しかもその日は、翌朝まで懇切丁寧に起こりうる危険を説明され、その翌々日にはちゃんと覚えたか口答試験が待ち受けていたのだ。

これが、ただ王子の身の安全の為だけであつたなら、ロダーはまだ堪えることはなかっただろう。マリスを守るのは自分だと、改めて心に誓っていたに違いない。

けれど、カウザルもまた、マリスを王子としてではなく、大切な弟のような子供に万が一のことがあつたらどうするのかと怒っているのだ。だから、彼の言葉は心に響くし、辟易しても腹が立つても、自分の軽率さを認めることが出来た。

「お前が風邪を引いたら、お鉢が俺に回ってくつから嫌なんだよ。だから、お前は絶対に風邪引くなよ。引くなら俺がいない時にしろ」

「酷い」

「あ、罰として掃除な」

「えー!!」

言い忘れたように言われた言葉に、まさかそんな、と言った様子でマリスはロダーを見遣った。

「やるなって言われてることをやったんだ。当然だろ」

実際人のことを言えた彼ではないが、これはこれ。それはそれ。

「えー！嫌だああ!!」

マリスが非難の声を上げたところでどうこう為るものでもなく。

「うー…」

自分のことを棚上げしていることを恨めしげに思っても、結局は呻き声を上げるだけだった。

ホットレッド村（後書き）

ほのぼのとした感じに見えたら良いなあ、と。
一部訂正しました。

ホットレッド村 2

マリスと同年であるウイリアム・フィンスは、非常に賢い。

末は誉れ高き知恵者と名高い大賢者となるだろうと言われる程だ。王宮に居る頃からその素質を見せ、現在もその秘められた知能の片鱗を垣間見せている。

けれど、いずれこの国の帝王となるマリスの支えとなるように言われてきたウイリアムにとって、彼の行動は少々理解し難かった。

彼らしいと言えば彼らしい行動だ。乳母兄弟でもあるマリスなら、第一声は先ずこれだろう。

しかしながら、これは一体どういうことであろうか。

ウイリアムは、二人居る兄貴分でも長男に位置する少年を困惑げに見つめた。

「……カウザル」

「ああ、この人、怪我しているみたいだから、連れてきた。俺の部屋で寝かしておくから、治療道具を持ってきてくれないか？」

「いや、カウザル…？」

「なに」

二階へ上がろうとするカウザルは、何も感じないのか後ろを振り向きもせず応える。

ウイリアムは、青白い顔をしている敵兵をちらりと見遣った。

「その人…、敵兵、だよな？」

「ああ、そうだよ」

二つ下のロダーと同時期に声変わりした低めのテノールが、淡々と発せられる。

「何で、連れてきたの」

「さっき言った通り」

「捕虜に、するつもり…？」

「どうとでも」

問いに答えてはくれるが、いい加減痺れを切らし始めたカウザルの様子に、ウィリアムは慌てて戸棚の一番下にある救急箱を取り出した。

「マリスが居るのに」

カウザル自身の尽力と、当時自分達を大いに助けてくれた老婆の呪術師のお陰で、村人達は自分達が王宮で暮らしていたことがあることなど知らない。

現にこの家には特殊な結界が張られており、この家の中に居る限り、どれだけの大声を出そうとも、秘密は絶対外には漏れない。

「確かにそうだろうが、俺としては、近くで敵兵が倒れているのを村人が見つける方が、よっぽど面倒だと思っただけだな」

ウィリアムから救急箱を受け取りながら、カウザルは言った。

「ありがとう、ウィリアム。もう上に行くから。いい加減手当てしない」と

両腕の中に居る敵兵を抱えなおすと、ウィリアムの返事も聞かずに、カウザルは二階へと消えていく。

ウィリアムは、カウザルが去った後も啞然と彼が居たところを見つめ、次第に騒々しくなる外にも気付かず、もう一人の兄が呼びかけるまでずっと固まり続けた。

ぎゃんぎゃんと噛み付くマリスをさらりとかわし、ロダーは玄関の扉を開けた。

「先に風呂に入れ。芯から温まったら………ウィリアム？」

「……？ウィル、どうしたんだ？」

聞かれて、階段の前で固まっていたウィリアムは二人を見た。

「…カウザルが」

「カウザルがどうした？——…まさか、怪我して帰ってきたのか！？」

マリスが心配して聞けば、ウィリアムは緩慢に首を振った。

「まさか……何てことはないよな？」

ロダーの確認に、ウィリアムはさっきと同じように首を振る。

「じゃあ、何だ」

家に入り、玄関の扉を閉めると、ロダーはじれったそうに聞いた。ウィリアムは、恐ろしいものを見るように二階を見上げた。

「カウザルが——…敵兵を連れてきた」

一瞬、ロダーはウィリアムの言ったことが耳に入らなかった。その重要性がよく分からないマリスは、首を傾げた。

「それがどうしたんだ？」

「…敵兵、だよ？」

ウィリアムは言い聞かせるようにして言った。マリスは片目を睜めた。

「そりゃ、敵兵を連れてきたのは、普通はおかしいだろうけど……きつと、怪我をしているんだろ。それなら、カウザルだったらありそうじゃないか」

マリスが思うに、彼が、敵兵と雖もそこらで出会った怪我人なら放っておく筈がない。

「そりゃな……カウザルならな。……だが」

ロダーは言いかけて、止めた。

「何だよ」

マリスが追求すれば、ロダーの代わりにウィリアムが答えた。

「今戦っている敵国の兵士を……まさか、お前の近くに置くなんて、と思わないか……？」

「……全然」

言っている意味が分からないので、マリスは今思っていることを答えた。

そんなマリスに、二人の若い側近はため息をついた。

「いやさ？過剰な反応は逆に怪しいのは分かってるよ。でも念には念を、て言っだろ？そーいうのを考えたら、間違っても敵兵をこの

家に招くべきものじゃない」

「カウザルだつてそんなことは分かつてる筈なのに、さっきなんか血だらけの敵兵を村人が見つける方が面倒だつて言うんだ」

これはマリスではなくロダーに言っているようで、どうやらウイリアムは兄に自分の代わりに諭してやって欲しいようである。

弟の言っていることを理解しているロダーは、慌てて首を振った。
「待て、ウイリー。諭すのは無理だ。諭して、犬猫みたいにさつさと敵兵を元居たところにも戻してこいって言わすつもりなんだろ？ あいつはあいつの考えで以って動いてる。俺達はマリスに気をつけると注意を促すことぐらいしか出来ないよ。お前だつて無理だつたんだろうが」

「だつて、吃驚したんだ」

「そりや吃驚するだろうさ。俺も吃驚だとも」

マリスを置いて二人で言い合う中、その中心に居る当人が階段から姿を見せるのをマリスは二人を挟んだ先に見つけると、顔を綻ばせた。

マリスはカウザルが大好きだ。

「カウザル！」

血で汚れているのも気にせず、マリスは喜びいさんで久し振りの兄に抱き付いた。

「お帰り、怪我は無い？」

腰回りに抱き付く末っ子の頭を、カウザルは汚れていない方の手で優しく撫でた。

「ただいま、マリス。怪我は無いよ。でも、俺今血で汚れているから、離れてくれるか？」

「ああ、怪我してる人連れてきたんだっけ？」

マリスは合点したように言つと、言われた通りすぐさまカウザルから離れた。

「カウザル」

ロダーは兄を認めると、彼にしては珍しく真面目に渋い顔をした。

「何で村人が見つける方が余計面倒なの」

連れてきた理由がそれなら、その理由を問いたただせばいい。

普段は軽い性格で通っているが、幼い頃に王子の側近として命ぜられていた。実際には、護衛としてなのだ。

ロダーと同じように側近及び護衛として命ぜられているカウザルは、面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「ロダー、お前なら分かんと思ってたんだけど。……今まで、この村じゃあ戦闘のせの字も無かったんだ。魔物だつてこちら辺に現れることは少ない方だし、ここ十数年は人的被害も無い。そんな免疫まる無しの人達が、血塗れの兵士、しかもここ何年も見ていない敵兵を見てみるよ。恐慌するのは目に見えてる」

言われてみれば確かに。

この村で兵士なのはカウザルとロダーだけ。他の村人の殆どは農民や職人だ。第一、危険が少ないから身の隠し場所選ばれた。それに、この村の平均年齢は低めである。長年の経験や記憶を持っている者が圧倒的に少ないのだ。

「まあ、確かにあの兵士を殺さず助けたのは俺の気紛れだけどさ」

殺しても良かったのだという科白に、ロダーは思わず噛み付いた。

「おい、さっきまでの理由は何だったんだよ！」

「だから言つたろ？助けたのはただの気紛れというか直感というか直感、という言葉が出てきて、ロダーは口籠った。

カウザルは相当な術士だ。直感などと言われては、術士としての素質がカウザルに遠く及ばないロダーにはあまり口出し出来ない。

そしてカウザルは、言い逃れの為にそのようなことは口をしない。思わず舌打ちをする。

カウザルはそれには片目を眇めるだけにして、ウィリアムの方へ向き直った。

「ウィリアム、お前は」

言い分があるなら聞く。というカウザルに、ウィリアムは眉を寄せる。

「彼女は」

「寝てるよ。昏睡に近いかな」

暫く床を睨みつけ、ウィリアムは観念したように口を開いた。

「……怪我をしている人を見たら、カウザルは大抵助ける。僕達はそれを知ってる。今回も、きっとそれと同じようなことなんだろう。カウザルは帝国随一の魔導師だし、剣豪でもある。そうそう殺られるような人でもなければ、僕達に危害を与えないようにすることも出来るだろう。だから、君が直感通りに動いたんだと、考えることにする」

元々、カウザルの行動には意味があることが多い。

それは時に性質の悪戯であつたりとかしたが、重要なものを取り間違えたことはない。

だから、ウィリアムは開き直すことにした。きっと、ロダーも同じ選択をすることだろう。

何せ彼は、必要以上に深く考えることを好まない。

隣でマリスが意味もなくうるちよるする中、ウィリアムの言葉に、カウザルは面倒臭い言及がなくなるのは良いが、それは流石に買い被りだと渋い顔をした。

ホットレッド村 2（後書き）

あまり間を空けずに投稿出来たらと。

ホットレッド村 3

結局、ロダーもウィリアムも敵兵の治癒に手を貸すことを了承した後、マリスは一人、敵兵の眠るカウザルの部屋へと赴いていた。因みに、玄関前の掃除は今回の騒ぎで有耶無耶と言うべきか、免除されている。

血をだいぶ失っていたので、並大抵の音では起きないだろうが、それでもマリスはそおつと扉を開けた。

中に入って右手にあるのは書類の溢れかえっている場所、中央は窓から光が差し込むだけになっており、左手には仕切りがあつて部屋の半分ほどの広さの通路を作っている。そのすぐ向こうに、簡素な作りのベッドが置かれてある。

マリスは長兄が連れ帰った敵兵もとい怪我人を一目見ようと、仕切りに取り付けてある普段は掛けられていないカーテンから身を潜らせた。

老婆から貰ったと言うこの家はとても広く、各個室の中で最も広いこの部屋に置かれているものは、ゆとりのある配置になっている。お陰で手狭さを一切感じないまま、ベッドの隣にある椅子に腰掛けて、マリスは遠慮無く怪我人を観察し始めた。

「あれ？……男の人じゃん。ウィルの奴、何間違えてるんだろ」
赤味も一切無く眠る顔を見て、マリスは不思議そうに首を傾げた。そのまま、特に何もすることがないので、じつと捕虜の顔を眺める。長いことそうしていたが、扉の開く音で我に返った。

「マリス、ずっとそこに居たのか？」
今入ってきた、この部屋の主であるカウザルに訊ねられて、マリスは頷いた。

「だって、することないし。……掃除もなくなっただし！」
付け足された言葉に、カウザルは喉を鳴らして笑った。

「掃除好きじゃないんだなあ。お前は」

「良いじゃんか、別に」

拗ねるように視線を逸らし、口を尖らせる。

カウザルは優しい目でそれを見つめて、次にベッドで眠る人物を見遣った。

「……カウザル？」

急に静かになったカウザルに、マリスは不思議そうに首を傾げた。ふと気付いて後ろを見遣り、再びカウザルへと視線を戻す。

そこで、マリスはあることを思い出した。

「あ。ね、カウザル！」

大きな声で名前を呼ばれて、カウザルは目を瞬かせながらマリスの方へ視線を移した。

「何？」

「あのさ、ウィルの奴、間違ってたよな！この人のこと女の人とか言っちゃって、本当は男の人なのに、さ！」

勉強などでいつも正解を言い当てるのがウィリアムで、マリスは大抵間違が多い。しかし今度は自分が合っているのだと、マリスの顔に喜色を浮ぶ。

当のカウザルは、もう一度目を瞬かせた。

「マリス、この人、女の人。ウィリアムの言っている通りだよ」

「……………え」

その言葉に、マリスはかなりの悲壮感を漂わせた。

追い討ちをかけるつもりは無いのが、まだ彼女を見ていない口だけでもきつと一目見て気付くことだろう。

だから、カウザルは持ってきていた湯気の立ち昇る紅茶を啜るだけで、それ以上は何も言わなかった。

ホットレッド村 3 (後書き)

ちょっと短いですが、これで一区切りです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1844r/>

月と戦星

2011年11月30日20時51分発行